

図画工作科学習指導案

横浜市立和泉小学校 指導者 村松 美佐

1. 日時・場所 令和2年1月23日(木) 第5・6校時 場所 図工室
2. 学年・組 第4学年1組 33名(うち交流級児童1名)
3. 「学習の方向性」から題材へ

「学習の方向性」

材料や場所などを基に工夫してつくり続けることを楽しむ。

A 表現(1)造形遊び

子どもたちの姿

- ・図工の学習は好きで、新しいものへの興味・関心は非常に高い一方で、自分の思いをもち、最後までその思いをもち続けて粘り強く取り組むことには課題がある児童が多い。
- ・前期にカラフルな洗濯ばさみを使った造形遊びを行った際には、「思いのままに」洗濯ばさみを並べたりつなげたりする活動を楽しんだが、洗濯ばさみの色を意識したり、様々なつなぎ方を見つけたり、また場所と大いに関わって工夫したりする児童は少なかった。また、友達のしていることやその面白さへの関心が薄く、個人個人での活動は楽しんだが、友達のから刺激を受け、よりよいものをつくらうとする姿はあまり見られなかった。

教師の願い

- ・形や色から自分なりのイメージをもち、最後までつくり変え続けながら、自分のつくりたいものをつくってほしい。
- ・場所と関わりながら、「工夫して」つくることで、何の変哲もない場所が、最終的にとても素敵なおもしろい空間に変わる体験をしてほしい。
- ・友達のしていることにも目を向け、よさや面白さを伝え合ったり、より自分のつくりたいもののイメージをもったりしてほしい。

題材名

つなげて ならべて 広げていくと・・・

～紙コップをつなげたり、並べたり、組み合わせ方を工夫したりして、

思いついたことを表そう～

A 表現(1)造形遊び

題材目標

- 紙コップの特徴を生かし、繋げたり、並べたり、組み合わせたりして、つくり続けることを楽しむようにする。
- 白一色の紙コップやその場にあるものを基にやってみたいことを思いつき、繋げたり、並べたり、組み合わせたりしながら、体全体の感覚を働かせてつくり続けられるようにする。
- 自分や友達のつくっているものを見て、よさや面白さを感じ取り、友達と思いを伝え合うようにする。

題材について

本題材は、紙コップを繋げたり、並べたり、積んだり、重ねたりすることを組み合わせ、見慣れた場所を素敵なおもしろい空間へと変化させる造形遊びである。紙コップは、児童にとってとても身近

な材であるが、それらが大量に、しかも白 1 色だけが集まっていることは、日常とはかけ離れており、児童の興味を引く題材になると考えた。紙コップという材にふれながら見つける様々な形や白 1 色だからこそ感じる美しさは、児童の直観力や想像力を刺激し、自分のつくりたいもののイメージをもって、工夫してつくり変え、つくり続ける意欲につながるものと考え。

○学習の方向性にかかわる育む資質・能力と本題材の関連

- ・ 複数の紙コップを繋げたり、並べたり、組み合わせたりすることで、単体ではできない新しい形をつくり出したり、その形を基にやってみたいことに思いを巡らせたりすることは、発想や構想の能力を育むことにつながる。
- ・ 活動の合間に、相互鑑賞の時間を取り入れたり、様々な角度からつくっているものを見るように声をかけたりすることで、つくり続ける意欲やさらにつくり変えて面白いものにしようという意欲を高めるとともに、創造的な技能の能力を高めることにつながる。

○本題材における【共通事項】についてのとらえ

【共通事項】

- ・ 自分の感覚や活動を通して、形や色などの感じをとらえること。
- ・ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。

自分の感覚や活動を通して、紙コップを繋げたり、並べたりするなどしてできた形や色の組み合わせのよさや面白さをとらえ、自分なりのイメージをもつこと。

4. テーマに迫るために

部会テーマ **工夫してつくることを楽しむ子どもの姿を目指して**

○出会いの工夫

普段と少し違う図工室(机や椅子を脇に寄せ、フロアを広くした)の中央に、紙コップをランダムに積んだり並べたりして置いておき、大きな白い布で隠しておく。活動内容を確認する中で布を外し、大量の紙コップと出会うようにする。日常とは違う雰囲気の中、見たこともない量の材を目にすることは児童の学習意欲を高めるために有効であると考え。また、題材名や題材名の近くに、ツードンクリップや輪ゴムで繋げたユニットをあしらったり、試しの時間に補助材(ツードンクリップや輪ゴム)を利用して工夫することのよさや面白さに気付かせたりして、児童の「工夫してつくりたい」とする意識を高めたい。

○場の設定の工夫

図工室の机や椅子を脇に寄せたりランダムに配置したりして、中央には児童が集合できるだけのフロアをつくる。机や椅子を使い、高さを利用した工夫を思いつく児童もいるだろうし、広いフロアに工夫して並べたり積んだりする児童もいるだろう。また、図工室だけでは 33 人が活動する場所としては狭くなることが考えられるため、図工室から出て、その前の廊下や階段なども使ってよいこととする。そうすることで、児童はよりその場と関わり、場を生かした活動ができるものと考え。これらの場を生かして、工夫してつくり続けることができるようにしたい。

○共感的支援の工夫

児童が活動を進める中で、紙コップの繋げ方や並べ方の新しい組み合わせ方を見つけている様子や、自分なりのイメージをもって活動している様子を見取り、お気に入りポイントやおすすめポイントを聞いたり全体化したりして、工夫してよりよいものをつくろうとする姿に期待したい。また、「このあと、どうなるの？どうしたいの？」と言った言葉かけを積極的に行い、つくりたいもののイメージをより明確にして、見通しをもって活動に取り組めるようにしたい。

○小中一貫の視点

感じたことを体全体を使って思いのままに表現してきた低学年から、中学年では工夫して表すこと、そして高学年では効果的に表すことができるようになってほしい。さらにその先にある中学校に造形遊びの活動はないものの、「形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること」「形や色彩の特徴を基に、対象のイメージをとらえること」という共通事項は続いていく。紙コップという材から感じたことを大切に、その空間を面白くつくりかえていこうと工夫することは、児童の感性を養い、中学校の美術科の学習へとつながっていくと考える。

5. 題材の評価規準

造形への関心・意欲・態度	紙コップに興味をもち、繋げたり、並べたり、組み合わせたりして、つくり続けることを楽しんでいる。
発想や構想の能力	紙コップや空間を基にしたり、友達と関わったりしながら、やりたいことを思いついている。
創造的な技能	自分の思いをもとに、工夫して繋げたり、並べたり、組み合わせたりして、つくり続けている。
鑑賞の能力	友達や自分のつくったもののよさや面白さを感じ取り、感じたことを伝え合っている。

6. 指導と評価の計画 2時間

ア 紙コップでどんなことができるかな？ (15分)

イ つなげて、並べて・・・組み合わせを工夫して、どんどん広げていこう！ (50分)

ウ 図工室を見てみよう！どんなところに工夫がかかっているかな？ (25分)

	子どもの学習活動	評価規準と評価方法	教師の指導
1時 (15分)	ア 紙コップでどんなことができるかな？		
	<p>○10個の紙コップで、どんなことができそうか試す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高く積めるかな。 ・くねくね並べてみよう。 ・クリップで繋げると面白い形ができるな。 ・輪ゴムがあれば、横に置いても転がりにくい。 ・もっとたくさん使ってやりたい。 <p>○12000個の紙コップと出会う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わあ！すごい数の紙コップだ！ ・おもしろそう！ 	<p style="text-align: center;">関</p> <p>紙コップに興味をもち、どんなことができるかに思いを巡らせている。 <つぶやき・活動の観察></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○様々な方法で紙コップを組み合わせたユニットを作っておき、イメージが広がらない子どもの手掛かりとなるようにする。 ○何人かの表現を取り上げ、次の活動の手がかりとなるようにする。 ○活動の約束を確認する。 ○紙コップを布で覆って隠しておき、一斉に見せるようにすることで、興味を煽り、活動への意欲を高められるようにする。
1 2時 (50分)	イ つなげて、並べて・・・組み合わせを工夫して、どんどん広げていこう！		
	<p>○たくさんの紙コップを繋いだり、並べたり、組み合わせたりして、思いついたことを表す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机や椅子を使って、高さを変えて並べてみよう。 ・下向きにたくさん重ねていくと塔みたい。 ・互い違いに並べてみたらどうなるかな。 ・少しずつ重ねると、曲がっていくのがおもしろい。 ・階段の段々を使ってみたいな。 	<p style="text-align: center;">関</p> <p>どんな風に組み合わせたら面白くなるかと思いを巡らせ、つくり変えたり、つくり続けたりしている。 <つぶやき・対話・活動の観察></p> <p style="text-align: center;">発</p> <p>紙コップや空間を基にしたり、友達と関わったりしながら、やりたいことを思いついている。 <活動の観察・つぶやき・対話></p> <p style="text-align: center;">創</p> <p>思いついたことを基に、紙コップを工夫して並べたり繋げたり、組み合わせたりしながら、つくり続けている。 <活動の観察></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○思いついたことをやり続けられるように、称賛したり励ましたりして声をかける。 ○つくりたいもののイメージをより明確にできるような声掛けをする。 ○紙コップを図工室の中央に配置しておくことで、取りに行きながら友達の活動の様子にも目が向くようにする。 ○途中鑑賞の時間を設け、友達がつくりつつあるものから、工夫したことの良さや面白さを感じ取り、伝え合えるようにする。

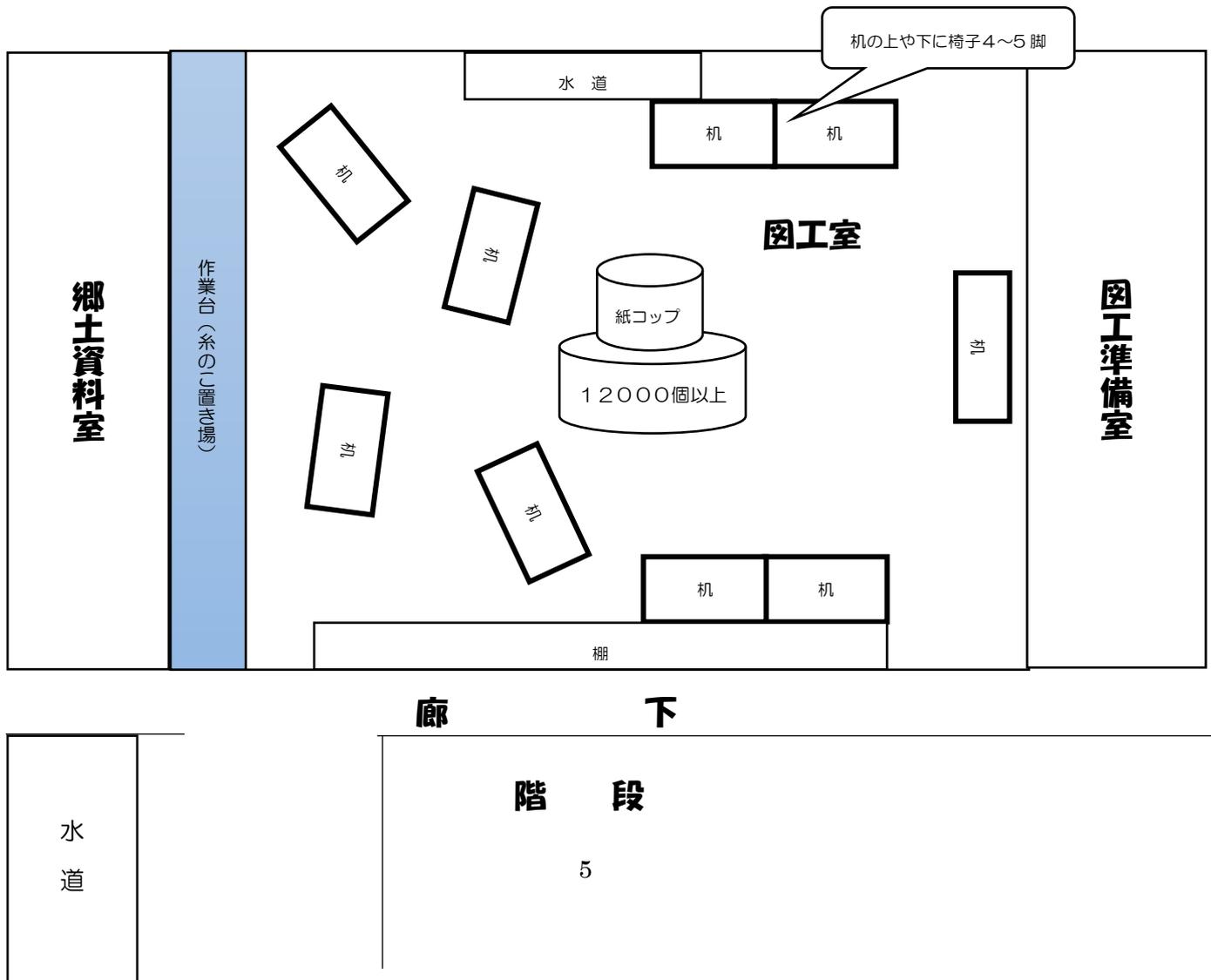
2時 (25分)	ウ 図工室を見てみよう！どんなところに工夫がかけられているかな？	
	<p>○できたものを見て回り、感じたことを友達と交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この並べ方、そろっていてきれいだな。 ・たくさん積み重なると、雪の塔みたいだ。 ・真っ白な雪の世界みたい。 ・自分では思いつかなかった工夫があって、すごい！ <p>○片付けをする。</p>	<p>関 自分や友達のつくったものを楽しんで見たり、そのよさや面白さに気付いたりしている。 <活動の観察・つぶやき・対話></p> <p>鑑 自分や友達のつくったものの形や色や、活動場所全体に広がった紙コップからイメージを広げて、感じたことを自分の言葉で話している。 <活動の観察・つぶやき・対話></p>

7. 準備

児童： なし

教師： 白紙コップ(12000個以上)、白い大きな布、ツェンクリップ、輪ゴム(白)、小さな紙袋

8. 場の設定 ※メインは図工室だが、その前の廊下や階段にも広げていってよいことにする。



9. 研究内容についての振り返り(考察)

1. 「学習の方向性」と【共通事項】を基にしたカリキュラムマネジメントについて

前期に行った造形遊び「せんたくばさみ de 図工室が大変身！」を終えた後、改めて「学習の方向性」と【共通事項】を見直した時、「材料や場所と関わって工夫してつくり続けること」と「友達のしていることに目を向けたり、一緒に活動したりすること」が難しいということが、課題として見えてきた。

そこで、今回は主題材として白色紙コップを使うことにした。造形遊びをするにあたり、紙コップは以下の点でとても優れているように思われた。

- ①安価で大量に用意できること
- ②一つ一つは軽量で子どもでも簡単に扱うことができること
- ③白一色という日常にはあまり見かけない魅力的な色
- ④何度でも繰り返し使用できることで、つくり、つくりかえ、つくり続けることができること
(学校の共有財産としてもリユースできることは大切！)

実際、普段目にしたことのない12000個の紙コップと出会ったとき、子ども達の「やってみよう！」「面白そう！」といった学習意欲は格段に上がったように感じた。そして、どの子も手を止めることなく、つくり続ける姿が見られた。また、白一色という色が、自分がつくりたいものの形をとらえ、イメージしやすくしているようだった。

また、一人ひとりの活動スペースを確保し、場所と関わるができるよう、図工室の机の配置を変えたり、活動場所を図工室だけでなく廊下や階段にまで広げたりしてみた。すると、階段の段差を生かして紙コップを敷き詰めたり、図工室の机と椅子を利用して高さを出して紙コップを並べてみたりする姿が見られるようになった。これは、前期には見られなかった姿であり、場の設定の重要性を改めて感じる機会になった。

そして、「工夫してつくり続ける」ために、補助材としてツェダンクリップと輪ゴムを使用することにした。白色紙コップの色を壊さないよう、ツェダンクリップは透明のものを、輪ゴムも白いものを用意した。これらを使って紙コップ同士をつなぎ、ユニットをたくさんつくって組み合わせることを、子ども達が考える工夫として想定していたのだが、実際に活動に入ると、紙コップを並べたり積んだりする子が多く、ツェダンクリップや輪ゴムを使って工夫をしようとする子があまりいなかった。導入の段階では、子ども達が見つけたツェダンクリップや輪ゴムで紙コップを繋げる工夫をたくさんしており、これらを使用することで工夫の幅が広がることに子ども達は気付いていたし、全体で共有もしていたので、これは予想外だった。それでも、よくよく話を聞いてみると、子ども達なりに「工夫する」ことは考えていたようである。子ども達の考える工夫とは、「紙コップを上(向き)下(向き)上(向き)下(向き)・・・ってしたよ。」「横から見ると真っすぐ並んでいなくて、曲がっているよ。」など、紙コップの並べ方を意識して工夫をしているようだった。教師の思う「工夫」と子どもの考える「工夫」には、イメージの相違があることに気付かされた。どのような言葉かけをすればよかったのか、教師と子どものイメージをできるだけ近づけるためにはどうしたらよかったのかという課題が残る授業だった。

最後に、このように補助材を用いた工夫をすることができなかった理由として、本校のカリキュラムマネジメントにも課題があるのではないかと考えている。実際、子ども達の話や話を聞くと、これまでの造形遊びの経験は少なかったようである。低学年の時に、並べたり重ねたりする活動を十分に行っていれば、12000個の紙コップを前にしたときに「並べるだけではつまらないな。だから、ツェダンクリップ

などを使って工夫をしてみよう。」という思いをもてたのではないだろうか。経験が少ない本学級の児童たちは、低学年のようにたくさんの紙コップを並べたり重ねたり積んだりすることだけでも十分楽しみ、満足してしまったのではないかと思うのである。

今回、本授業をするにあたり、本校の職員の多くが「造形遊びってどうやるんだろう？」と興味をもって授業を見に来てくれた。お手本になる授業にはならなかったが、授業後、「すごく楽しそう！」「私もやりたい！」と言ってくれた職員も多く、子ども達の次につながる授業になったと思う。来年度以降、それぞれの学年で充実した造形遊びが行われることを期待したい。

2. 主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりについて

子ども達が主体的・対話的に学習に取り組むためには、

- ①「やってみたい！」という意欲をもたせること
- ②何をしたらよいかということが理解できていること
- ③友達との関わりや自分のやってみたいことがしやすい環境

の3点が大切であると考え。これらを実現するため、今回は特に紙コップとの出会わせ方と場の設定、そして題材名を工夫することを重点をおいて実践してみることにした。

①「やってみたい！」という意欲をもたせること

導入の段階で、一人に10個ずつの紙コップを渡し、どんなことができるのかお試しをさせた。実際に紙コップに触れてみると、「もっとほしい！」「もっとあれば〇〇ができそうなのに。」「先生、△△でやってもいいの？」というつぶやきがたくさん聞こえてきた。この時、子ども達の頭の中には既に活動場所とそこで自分なりにやってみたいことのイメージがあった。隠しておいた12000個の紙コップと出会わせたと、うわあっ！」「やったあー！」と歓声が上がリ、嬉しそうにたくさんの紙コップを抱えて、自分の活動場所に運んでいた。自分なりのイメージがもてたことで、どの子も最後まで手を動かして続けることができた。

②何をしたらよいかということが理解できていること

同じく導入の段階でお試しをする中で、子ども達が見つけた様々な方法(工夫)を全員で共有した。初めからたくさんの紙コップに出会わせてしまうのではなく、少しの紙コップでどんなことをしたらよいか(並べる・重ねる→補助材を使って工夫する→これらを組み合わせて工夫する)ということを経験を追って行うことで、困って固まってしまう子は一人もいなかったように思う。また、「どうしたらもっと工夫できるかな。」「どう(工夫)しようかな。」と自分との対話を深め、考えながら手を動かしている様子も見られた。

また、隣のクラスで事前授業(題材名:ならべて つんで かさねてみたら・・・)をさせてもらった時には、紙コップ同士をつなげることや補助材を使って組み合わせを工夫することにほとんど目が向けられなかった反省から、本時では題材名に「つなげる」という言葉を入れ、活動場所に紙コップを「広げて」いこうというイメージをもたせるように考えた。しかしながら、前述のようにほとんどの子ども達は補助材を使った工夫にまで達することができなかった。指導案検討の時から、子どもがイメージできる言葉とは何だろうといろいろ考えてきてみたが、なかなかこれという言葉に出会えなかった。どのよう

な言葉で示すことが、教師の意図するイメージを子ども達に伝えることができるのかが、これからの課題である。

③友達との関わりや自分のやってみたくがしやすい環境

本時では、活動場所を図工室だけではなく、その周辺にまで広げてみた。図工室をいつもの机の配置ではなく、ランダムに並べ替え、椅子も敢えて机の上にも載せておくなどして、普段目にしていない図工室の様子とは雰囲気を変えた。このようにすることで、子ども達の「あの場所に(紙コップを)置きたい!」「あの場所で活動したい!」という意欲を引き出すことができたと思う。

更に、今回は12000個の紙コップは分散して置かず、敢えて図工室の中央にまとめて置くことにした。自分の活動場所から紙コップを取りに来る時に、別の場所で活動している友達のやっていることに目が向くように考えていたのだが、子ども達は自分のことに夢中であまり目が向けきれなかったように思う。しかしながら、活動の間に、お互いのつくっているものを全員で鑑賞する時間を設けたことで、「それ、すごいきれいだね。」「どうやってやったの?」などと声をかけあっている様子が見られるようになった。友達との対話を通して、自分のつくっているものを見つめ直し、より深く考えながら取り組む子が増えたことは、嬉しい変化だった。

また、補助材として使うツェンクリップや輪ゴムをもっていきやすいように、一人ひとりに持ち手のついた小さな紙袋を用意した。使いたい分の補助材を活動場所にスムーズにもっていくことができ、活動時間を保証する意味で一役買っていたと思う。

本時の授業に関して言えば、イメージしていた子ども達の姿が見られ、嬉しい反応や変化があった反面、手立ての全てが上手くいったわけではなく、むしろどうしたらよかったのだろう、と課題も多く見えてきた。目の前の子ども達の実態をより深く見つめ、今後もよりよい図画工作科の授業を目指していきたい。